

Title	「状態」を表すNヲシテイル構文の意味について : 現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いた調査から
Author(s)	小葉, 哲哉
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 48-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97306
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「状態」を表す N ヲシテイル構文の意味について

—現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いた調査から—

小葉 哲哉*

キーワード：N ヲシテイル構文、単なる状態、視覚優位

1 はじめに

日本語の動詞「する」には、(1)のように広義の「状態」を表す用法が存在する。(1a)は主体に現れる恒常的な状態を表す。(1b)では一時的な状態を表し、時間の経過や新たな事態が生じることで、描写された状態が消失することが想定される。

- (1) a. 彼は {青い目／整った顔立ち} をしている。 [恒常的状态]
b. 彼女は {(泣きはらした) 赤い目／素敵ない髪型} をしていた。 [一時的的状态]

本稿では、(1)のような表現を「〈状態〉を表す N ヲシテイル構文」と呼び、その文法的特性、特にヲ格目的語名詞句の特性について議論する。

〈状態〉を表す N ヲシテイル構文のヲ格名詞について、興味深い分析をしている先行研究に角田(1991, 2009)がある。角田(1991, 2009)は、当該構文を「所有文」の一種と見て、ヲ格名詞が主体が所有する被所有物であると分析する。特に、ヲ格名詞が、(2)の所有階層における「身体部分」と「属性」を表すものでなければならないと提案する(角田 2009: 146) (影山(1990)も詳細は異なるものの、同様の指摘をしている)。

- (2) 身体部分 > 属性¹ > 衣類 > (親族) > 愛玩動物 > 作品 > その他の所有物

(角田 2009: 127, 強調は筆者)

* 本稿の内容の一部は、研究会「洛中ことば倶楽部」(2023年7月1日、オンライン開催)および関西レキシコンプロジェクト(KLP)(2024年5月18日、於大阪大学)にて発表した内容を改訂したものである。参加くださった方々より、貴重なご指摘ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。本研究は、JSPS 科研費 22K00508 の助成を受けている。

¹ ここでの「属性」について、角田(2009: 128)は、「身長、体重、性質、健康状態、体温、血圧、身体機能(運動、反応、排泄作用等)、意識等が属す」と述べ、さらに名前も含まれると指摘する。

この「属性」という概念は、N ヲシテイル構文の意味を考える上でとても重要な役割を果たす。しかし、「属性」という用語自体は“property”を表す用法や属性叙述文における「恒常的状态」を表す語としても使われており、混乱が生じやすい用語と言える²。本稿では、「属性」の代わりに、“attribute”の意味で「特性」という名称を使うことにする。

角田(1991, 2009)の他にも、〈状態〉のN ヲシテイル構文を「所有文」と分析する研究は少なくない(影山(1990, 2004)、Tsujioka(2002)、澤田(2003a, b)、小薬(2023a, b); 靱山(2021: 83)も参照)。但し、どのような意味を表す名詞がヲ格名詞として生起できるのかという点については、研究者によって意見が異なる。例えば佐藤(2003: 23)では、(3a)のように「ほくろ」がヲ格目的語として容認されないと主張する。しかし、大神(2021: 91)が指摘するように、実際に使用されている例がインターネット上に見つかる。

- (3) a. * 花子はきわだって大きなほくろをしている。 (佐藤 2003: 23)
b. (ほくろの特徴的な芸能人の話題で) [芸能人 A さんは] 確かに特徴的なほくろしているよね。 (https://girlschannel.net/topics/2566437/)

本稿の興味関心は、〈状態〉を表すN ヲシテイル構文のヲ格名詞の意味的特徴を観察することで、「N ヲシテイル構文が表す「状態」とはどのようなものか」を明らかにすることにある。この問いに答えるため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ)で「N ヲシテイル」形式全例の調査を行った。本稿ではその結果を考察した上で、当該構文の意味的特徴を考察する。

2 〈状態〉のN ヲシテイル構文におけるテイルの意味

考察にあたり、始めに〈状態〉のN ヲシテイル構文がどういう特徴をもつ構文かを規定しておく必要がある。なぜなら、日本語の「N をする」表現には様々な用法があり、一体どの例が〈状態〉のN ヲシテイル構文であるかを判別する基準を立てておく必要があるためである。

佐藤(2005: 149)は、この構文を規定する重要な特徴として、(i) シタ(・スル)形が許さ

² その他、「側面」(高橋 1975, 1984、澤田 2003b、小薬 2023b)、「特質(名詞)」(小野 2014)、「属性カテゴリー」(森山・梅原・富永 2015)、「相(facet)」(由本 2020)、「部面」(益岡 2021)「サマ」(小薬 2023a)など、それらが指示する範囲は厳密には異なるものの、類似した概念を指す用語が様々に使われている。

れない(例: *彼は {青い目/端正な風貌} を {した/する}。)、(ii) テイル形が〈単なる状態〉を表し、動作継続や結果継続を表すものではない、(iii) フラグ名詞を修飾する要素が必要、という点を指摘している。

特に、(ii) に関する指摘は、当該構文を規定する上で重要である。日本語のテイル形には、以下のように多様な解釈があることが知られている。

- (4) a. 犬が走っている。/花瓶が壊れている。 [動作継続/結果継続]
b. 彼は公園で毎朝走っている。/彼は既に退職している。 [習慣/パーフェクト]
- (5) a. この国道は大きく北に曲がっている。 [単なる状態]
b. あの銅像は、今日サンタの服を着ている。 [単なる状態]

佐藤(2005: 149)は、〈状態〉のNヲシテイル構文におけるテイル形の意味を、(5)に見られるような〈単なる状態〉であると位置づけている。「単なる状態」(「単純状態」とも呼ばれる)とは、その状態に至るための変化を前提としない静的事態のことである(金田一 1955、吉川 1976、奥田 1978、金水 2000 など)。〈単なる状態〉が構文的に規定される意味であるため、事態の成立を表す完成相過去形式(シタ形)が容認されないとされる。また、変化後の状態を表す「~した状態だ」(宮腰 2009: 49-50)や変化の準備段階や前兆局面を表す「Vかけている」のようなテストフレームにも適さないこともその証左となる。

- (6) a. # この国道は大きく北に曲がった。
b. # あの銅像は、今日サンタの服を着た。
- (7) a. * この国道は大きく北に {曲がった状態だ/曲がりかけている}。
b. * あの銅像は今日 {サンタの服を着た状態だ/サンタの服を着かけている}。

(6a)(7a)で言語化される変化の局面は、常識では起こり得ないこととして容認されない³。(6b)(7b)「サンタの服を着る」場合であれば、誰かが服を着せることで「服を着る」という

³ 例えば、「国道を作る際に用地に確保が難航したため、それが原因でこの国道は大きく北に曲がった。」という場合は容認可能である。これは、(b)「銅像がサンタの服を着る」とは異なり、具体的な文脈があれば変化過程が想定可能であることによる。つまり、語彙的なレベルでは変化を想定することができるが、(5a)のような〈単なる状態〉を表す文として見た場合はそうした想定をしないということである。(5b)は語彙的なレベルでもその想定が不可能であるという点に注意されたい。

主体の変化が生じることは現実に起こり得る。実際、「あの銅像は {サンタ姿になった／徐々にサンタ姿になっている／サンタ姿の状態だ／サンタ姿になりかけている}。」であれば、ここで意図する意味で容認できる。それにも関わらず(7b)が容認されないのは、「着る」という行為が銅像によって自ら引き起こされる事態ではないこと、言い換えれば、この文が動詞が語彙的に含意する〈状態〉のみを表し、その原因となる事態の変化の局面を含意しないことを示唆している。つまり、(5)のテイル形は(眼前の)ある静的事態を変化動詞の結果継続用法でもって事態を描写しながら、動詞に語彙的に含意される変化の局面は「捨象」されているとあってよい。

〈状態〉の N ヲシテイル構文も同様に変化の局面を欠いた〈単なる状態〉を表すことは、以下の(6)(7)との並行的振舞いから明らかである。

- (8) a. * 彼は (さっき) {青い目／端整な風貌} をした。
b. * 彼女は (さっき) {赤い目／変わった風貌} をした。
- (9) a. * 彼は {青い目／端整な風貌} を {した状態だ／しかけている}。
b. 彼女は {?? (泣いて) 赤い目／*変わった風貌} を {した状態だ／しかけている}。

以上、〈状態〉の N ヲシテイル構文は、その状態に至る変化の局面を含意しない〈単なる状態〉を表すという特徴をもつ。この佐藤(2005)が指摘する特徴により、当該構文は他の「する」構文と文法的に区別される。例えば、「ネクタイをする」のような着用行為を表す「する」(影山 1980: 78-103, 角田 2009: 146, 岸本 2023) や「げんな顔をする、睨むような目つきをする」のような身体による心情や態度の伝達を表す「する」(森山・梅原・富永 2015, 岸本 2023) は、〈状態〉の N ヲシテイル構文と異なり上述のテストフレームに適合する。これらの「する」構文が文法的に異なる性質をもつことの証左である。

- (10) a. 彼は {ネクタイ／怪訝な顔／睨むような目つき} を {している／した}。
b. 彼はゆっくりと {ネクタイ／怪訝な顔／睨むような目つき} をしている。
c. 彼は {ネクタイ／怪訝な顔／睨むような目つき} を {した状態だ／しかけている}。

次節では、〈単なる状態〉を表すという構文的特徴に基づいて行った、〈状態〉の「N ヲシテイル」構文に関するコーパス調査の概要を説明する。

3 BCCWJ に基づくコーパス調査—データの分類と観察

国立国語研究所による BCCWJ を用いて「N ヲシテイル」形式の例を収集した。検索には『中納言』を使用、すべてのジャンルを対象として、短単位検索で用例を検索した⁴。検索の結果、まず 26,225 件の「N ヲシテイル」形式を持つ表現が抽出され、そこから目視で〈状態〉解釈のみが可能なもの、特に、シタ形が容認されないと判断できる事例を個人の内省判断に基づいて抽出し、タグ付けを行った。

また、様々な意味を表すヲ格名詞のうち、調査対象から外したものが二種類ある。1つは、表 1 のような状態事象や変化事象を表す動名詞や複合名詞、すなわち、事象名詞にヲスルが後続する場合である。

カテゴリー	例
変化	起因、重複、循行、分類
状態	関係、関連、(文化水準での問題に) 値、一貫、所属、一致、類似、依存、孤立、混在、在職、在留、山積、安定、実在、潜在、伏在、渋滞、滞在、一時滞在、相対、沈座、当面、貧乏、自負、不足、不便、平行、矛盾；兵器依存、武器依存

表 1 BCCWJ で「N ヲシテイル」形として確認された変化・状態を表すヲ格名詞

一般に、主体の〈変化〉や〈状態〉という非対格的な出来事を表す漢語名詞は、「N ヲスル」という形式が許されない(例：消滅(*を)する)(Tsujiura 1990)。しかし実際は、国会議事録などの口語文体において、ヲ格が生起する(11)のような例が散見される。

- (11) これらの道路は災害とは関係なく非常に渋滞をしておるわけですが、特に災害が発生をいたしまして緊急のときには非常に混雑をいたします。

(BCCWJ OM46_00001)

文体による影響を除外するため、表 1 のような名詞を本稿の考察の対象外とする。

加えて、(12)のような〈職業・役割〉を表す名詞についても、修飾要素が必須でないなど、構文的に大きな違いがあるため考察から除外した。

⁴ 検索条件式は、「後方共起: 語彙素="を" ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素="為る" ON 2 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素="て" ON 3 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素="居る" ON 4 WORDS FROM」とし、ヲ格の前接要素をキーとして用例を検索。「を」の前接要素の品詞は指定せずに検索を行った(2022年7月7日実施)。

(12) はい、わたしはむか〜しラーメン屋をしていました。 (BCCWJ OC08_07157)

以上の結果、BCCWJより1,766例(N=26,225、6.73%)の恒常的・一時的状態解釈のNヲシテイル表現を抽出した⁵。その上で、影山(1990)や角田(1991, 2009)などに倣い、ヲ格名詞をまず〈部分〉と〈特性〉とに大別し、〈特性〉を意味的な観点でさらに下位区分して特徴を考察する。また、それぞれの名詞を「部分名詞」、「特性名詞」と呼称する。

まず、BCCWJで観察された部分名詞には、表2のようなものがある。この表を見ると、人間の身体部位を表す語彙が多く見られる事がわかるが、一方で、動植物、昆虫、自然物、無生物など、人間以外の部分名詞も使われることがわかる。

カテゴリー	例
部分	[人] 身体、体、頭、顔/面、口、唇、歯、耳、頬、顎、首、髪、目、双眸、まつげ、 旨、腹、腰、背中、骨格、骨組み、肌、皮膚、毛; 神経、心臓、筋; おかつぱ頭、 タヌキ顔、赤ら顔、黒髪、どんぐり目、太鼓腹
	[動物・虫] 尾、骨組、背甲、羽、翼、馬体
	[植物] 茎、葉、果実、幹、輪郭
	[自然物] 岩肌、地面、空
	[無生物] 機体、設備

表2 BCCWJで観察された〈部分〉を表すヲ格名詞の例

次に、特性名詞について観察された例を概観する。「特性 (attribute)」とは、「事物の本質的な特色を表す概念」と規定される(『日本国語大辞典』)が、当該構文においてはいくつかのグループに分類できる。BCCWJでの観察に基づき、確認された特性名詞を意味カテゴリー毎にまとめたものが、次頁の表3である。具体的には、〈色〉〈形〉〈外見・外観〉〈構造・成り立ち〉〈音声・言葉〉〈味・触感〉〈性質・感覚〉〈その他〉といった8つのカテゴリーを取り出した。

⁵ 本稿でのデータ抽出の方法は、目視と内省判断に基づいており、データの精度および信頼性の観点からすれば、最善の方法であるとは言えない。しかし、2節で述べたように、テイル形には複数の解釈が可能であり、調査上、問題とする表現を形式的に特定しにくいという構文的特徴から、やむなくこの方法を採用した。

一方、本稿の目的は当該構文の表す構文的意味、特に可能な名詞と不可能な名詞の意味的な範囲を明らかにすることにある。つまり、量的なデータを取ることを本稿では副次的な目的とし、むしろヲ格名詞の意味的多様性を観察することに重きを置きたい。

以上の理由で、本稿では、データの精度および信頼性の問題は今後の課題とし、あえて網羅的に全例を目視で確認するという方法を選択する。

分類	カテゴリー	例
A 視覚によって 主体から直接 観察できる特性	色	色、黄色、緑色、茶色、紫色、青緑色、黄白色、褐色、灰色、暗緑色、黒灰色、深緑色、乳白色、桃色、桜色、ばら色、ルビー色、キツネ色、銀色、栗色、紅色、珊瑚色、醤油色、肉色、闇色、鈍色、象牙色、鶯色、鶯色、黄金色、鉛色、虹色、土気色、保護色、単色、体色、顔色、肌色、漆黒、グリーン、ナイルグリーン、真紅…
	形	[人] 体格、体軀、体形、体型；顔貌、顔立ち、顔つき、顔の線、顔形、細面、面立ち、面付き、面相、面体、面持ち、面容、相貌、輪郭；髪形・髪型、毛並み、眼差し、目付、目鼻立ち、バッティングフォーム、ランニングフォーム… [物・自然物] 形、形状、形態、姿形、地形、図形；球形、円形、楕円形、人形、凸レンズ形、八角形、円筒形、半円筒形、円錐形、梯形、長方形、球体、卵形；球状、階段状、とっくり状；樹形、葉形、花形、枝分かれ、角錐、結晶、カーブ、固形；大きさ…
	外見・ 外観	[人] 外見、見かけ、見てくれ、態、容姿、容貌、姿、立ち姿、姿勢、姿態、気配、物腰、眼光、みなり、風体、風貌、風采、風、出で立ち、スタイル、プロポーション、ヘアスタイル、生活スタイル、生活様式；格好、恰好、なり、身だしなみ、ネクタイ姿、袴姿；人相、手相、骨相、腸相；様子、様相、やせ様、可愛がりよう… [物・自然物] 外観、リアビュー、模様、縞模様、木目、植相、川相、雪景色、(海・仏像・絵画の) 表情、様子、風情、佇まい、表記…
	構造・ 成り立ち	構造、立体構造、環状構造、ジグザグ構造、正四面体構造、精神構造、組織構造、直線構造、平面構造、構図；結合、エステル結合、化学結合、金属結合、三重結合、二重結合；構成、番組構成、民族構成、編成；並び、密度分布、分布；(話の) 骨組；面構え、作り・造り、門造り、(建物の) 構え、(部屋の) しつらい、(車の) 出来、造作、造形表現、造り方、組み方、書き方、(美術の) 表現方法…
B 視覚以外の感覚で 主体から直接観察 できる特性	音声・言葉	音、声、歌声、発音、鳴き声；言葉遣い、言葉使い
	味・触感	味、まろやかさ、硬さ、肌ざわり、(ヌルヌルとした) 質感
C 主体に付随する事 物から間接的に観 察される特性	性質・感覚	性格、気風、根性、キャラ立ち、心立て、心持ち、生活様式、生活スタイル、経済状態、性質、機能、働き、体質、毛質、色調、色彩、色合い、色艶、嗅覚、味覚、勘、ネーミングセンス…
	その他	名前、年、歳、値段

表3 BCCWJで観察された〈特性〉を表すワ格名詞

表3に挙げるカテゴリーの分類基準は、以下の通りである。

(13) A 類

- a. 「色」: 「色」に関する概念を表す名詞。
- b. 「形」: 物体の平面・空間に占める有り様のうち、幾何的特徴を表す名詞。
- c. 「外見・外観」: 対象の外部に観察される特徴、様子を表す名詞。「形」より対象全体の外的特徴を指す。対象に対する観察者の主観的印象が喚起されやすい。
- d. 「構造・成り立ち」: 「構造」は対象の内部に観察される物理的特徴で、特に対象の部分同士の形状的な特徴を表す名詞。「成り立ち」は、対象が成立するプロセスそのものを表す表現でもって、その産物の形状的特徴を表す場合。

(14) B 類

- a. 「音声・言葉」: 聴覚によって知覚される特徴を表す名詞。「言葉使い」は文字などの視覚情報の場合もあり得るが、BCCWJ の実例は聴覚的特徴を指すものであったため、便宜上ここに分類した。
- b. 「味・触感」: 味覚・触覚で知覚される特徴を表す名詞。

(15) C 類

- a. 「性質・感覚」: 五感で直接知覚するのではなく、知覚した情報から推論・評価することで与えられる対象に内在する特徴を表す名詞。
- b. 「その他」: 名前、年齢、値段など、社会的制度に基づき対象に与えられ、同じカテゴリーの他の成員と区別されるための特徴を表す名詞。

各カテゴリーをさらに意味的な観点からまとめ上げ、(A) 視覚によって得られる特徴(視覚的特性)を表す A 類と、(B) 視覚以外の感覚によって得られる特徴を表す B 類、そして、(C) 五感によって直接得られはせず、別の情報から間接的に得られる特徴を表す C 類の 3 つに分類した。

C 類の特徴についてさらに述べると、例えば「彼は凶太い性格をしている」では、「性格」そのものを主体が直接認識するわけではなく、主体の何らかの行動や態度を認識し、その情報から主体の「性格」を推論してその特徴を述べた文となっている。また、「鳥男はキルギル・カラカシアンという妙な名前をしていた」(BCCWJ LBj9_00020)という例でも、主体を直接観察して「名前」を認識することはあり得ない。むしろ、「名前が書かれた名刺」を見るなど、主体そのものではなく、主体に付随する何かを観察することで初めてその特徴が認識できる。このように、別の知覚情報から間接的に得られる主体の特徴を

表すのがC類の名詞である。

BCCWJで観察された部分名詞・特性名詞の用例数、特に、異なり語数と延べ語数は、表4のようにまとめられる⁶。

カテゴリー		異なり語数 (%)		延べ語数 (%)	
部分		91 (22.47)		567 (32.11)	
A	色	66 (16.3)	272 (67.17)	234 (13.26)	1,122 (63.54)
	形	77 (19.02)		477 (27.02)	
	外見・外観	92 (22.72)		327 (18.52)	
	構造・成り立ち	37 (9.14)		84 (4.76)	
B	音声・言葉	8 (1.98)	13 (3.21)	19 (1.08)	25 (1.42)
	味・触感	5 (1.24)		6 (0.34)	
C	性質・感覚	25 (6.18)	29 (7.17)	46 (2.61)	52 (2.95)
	その他	4 (0.99)		6 (0.34)	
Total		404		1,766	

表4 BCCWJで観察されたヲ格名詞の意味カテゴリー毎の出現頻度

表4で各用例の頻度の傾向を見ると、延べ語数が最も多いのが部分名詞である。出現頻度順に例を挙げると、「顔」(267例)、「目」(58例)、「体」(28例)、「肌」(23例)、「髪」(12例)となった。部分名詞の次に、〈色〉、〈形〉、〈外見・外観〉、〈構造・成り立ち〉といったA類の特性名詞が並び、続いてC類〈性質・感覚〉〈その他〉そして、B類〈音声・言葉〉が並んだ。異なり語数(タイプ頻度)も同様の順序となった。

類ごとにしてみると、A類の名詞全体では、延べ語数が合計1,122例(63.54%)、異なり語数が272語(67.17%)と全体のおよそ7割を占め、その次に部分名詞が続く。C類、B類の名詞は、佐藤(2003, 2005)や澤田(2003, 2012)など多くの先行研究でその作例が挙げら

⁶ あらためて述べておくと、「単なる状態」用法としての解釈かどうかを判断するのが難しい場合が少なくない。この点で「結果継続」用法と連続的であるとも言える(奥田1978: 26-27も参照)。このため、BCCWJで確認できたNヲシテイルの例から、意味的な直感(ここではシタ形が許されるかどうか)という基準だけで問題の事例を正確に選び出すことはかなり困難だと言わざるを得ない。

データの信頼性に疑義が生じる状況は決して望ましくないが、それでもヲ格名詞の意味カテゴリーの分布、そしてその大まかな傾向をはかるため、あえてここでは「用例数」を提示することにした。

れてきたが、かなり周辺の事例であることが明らかとなった。この結果から、〈状態〉の N ヲシテイル構文が表す「状態」とは、主として視覚から得られる主体の特性に関する状態を表す、すなわち、「視覚優位」の事態を表す構文であるとまとめられる。

当該構文が表す視覚の優位性は、次の例の解釈や振舞いとも無関係ではないだろう。

- (16) a. 遺伝子を提供したのは賞金稼ぎのジャンゴ・フェットで、ヘルメットを取った兵士はみな彼の顔をしている。 (BCCWJ PM51_00625)
- b. その男は、175.5 cm ?? (ぐらい) の身長をしている。

(16a) 「彼の顔をしている」は、彼の顔のどのような特徴なのか、「色」なのか「構造」なのか「臭い」なのか「触感」なのかは表現として明示されていない。しかし、文の解釈は、「彼の顔と同じ見た目、あるいは同じ形の顔」をしている」と理解するのが最も自然である。つまり、視覚で得られる外見的特徴の解釈が、この構文にとってデフォルト（無標）の解釈であることがうかがえる。また、(16b) 「??175.5 cm ぐらいの身長をしている」では、「ぐらいの」のような近似を表す表現がないと座りが悪いと感じられる。これは、「175.5 cm の身長」という具体的な数値が、視覚で得られる特徴として捉えにくいためだと考えられる。

以上、BCCWJ から抽出した事例に基づいて、〈状態〉の N ヲシテイル構文のヲ格名詞として生起する名詞の意味的分布を見てきた。繰り返しになるが、用例を抽出する基準は「シタ形を容認しない」という内省直感に基づく判断である。実際に用例を観察していると、分類が難しい場合も少なくなかった。従って、表 4 に挙げた個別の数値自体を重要なデータとして扱うわけにはいかない。

しかし、表 4 の結果は、N ヲシテイル形式全体の傾向とも合致する。「N ヲシテイル」という形式からヲ格名詞を抽出し、頻度順に上位 20 位までの名詞とその用例数をまとめたものが、以下の表である。なお、ここで抽出されたデータには、言うまでもなく、本稿で扱う「〈状態〉を表す N ヲシテイル構文」以外の例、例えば、動作継続解釈や結果継続解釈の N ヲシテイル構文の事例も含まれていることに注意されたい。

N = 26,225

N	用例数	%	N	用例数	%
仕事	1366	5.21	思い	194	0.74
顔	966	3.68	食事	155	0.59
話	912	3.48	なに	147	0.56
何	709	2.7	作業	138	0.53
こと	604	2.3	勉強	135	0.51
生活	486	1.85	表情	129	0.49
活動	334	1.27	目	124	0.47
形	314	1.2	働き	121	0.46
準備	243	0.93	世話	114	0.43
努力	220	0.84	約束	112	0.43

表5 BCCWJにおける「Nヲシテイル」に生起するヲ格名詞

表5には部分名詞である「顔」や「目」、特性名詞も主体の〈形状〉を表す「形」、〈外観〉を表す「表情」が含まれている。このことから、Nヲシテイル形式の表現が視覚から観察される主体の特徴を表しやすいことが読み取れるだろう。

このような構文的意味の特徴を踏まえた上で、抽出された各例の観察で明らかとなった興味深い構文的特徴を次節で詳細に検討する。

4 構文的意味特徴の考察

BCCWJから得られた〈状態〉のNヲシテイル構文の用例を一つ一つ観察していくと、先行研究で見落とされてきたこの構文の興味深い特徴が見つかる。本節では、(i)ヲ格名詞、(ii)その修飾要素、そして(iii)主語名詞句の意味・形式的特徴の観点からそれらを考察する。

4.1 ヲ格名詞の意味的特徴

まず、ヲ格名詞の意味的特徴について、いくつか指摘できる。第一に、表3に挙げた意味カテゴリーの連続性が指摘できる。まず、部分名詞に関して、一見すると主体が何であるかが分かりにくい例が見つかる。

- (17) おはようございます。今朝もどんよりした空をしています。(BCCWJ OY03_00872)
(cf. 西宮の空は、今朝もどんよりした空(模様)をしています。)

この例では、「今朝」が「どんよりした空」を所有していることを表すわけではない。あえてその主体を明示するとすれば、「その地域の空」、例えば「西宮の空」などが該当すると思われる。ただ、仮にそうであるとしても、主体としての全体である「西宮の空」とその部分としての「空」をはっきり区別することは難しいだろう。むしろ、ここでの「空」は「空模様」という〈外観〉に近い意味を表していると考えられる。〈外観〉と連続的な〈部分〉の例と捉えられるのではないだろうか。

同様の意味的連続性を示す例として、次の「心臓」や「筋」がある。これは「度胸」を表すメタファー表現で、主体の〈性質〉に転義している。

(18) a. 彼は、ほんとにチャンスに強い。どんな心臓をしているのかわからない。

(BCCWJ PB17_00168)

b. 「... この黒さん[=囲碁の先手]、なかなかいい筋をしておるね」

(BCCWJ PB47_00162)

(a)の「心臓」は主体の性格や精神的な強さ、繊細さを表す比喩表現（換喩（metonymy））として用いられていることが文脈から見て取れる。また、(b)「筋」には、主体の素質を表す意味があり（『日本国語大辞典』）、ここではその意味で使われている。大神(2021:99-100)では、このように〈部分〉から〈性質〉へ転義した事例を指摘し、ヲ格名詞が「能力」や「技術」を転義的に表し、その修飾要素が能力や技術の程度を強調していると主張する。なお、「素質・能力」という意味への転義は、身体部位名詞特有の現象と考えられるが、「彼はいい {??素質/??能力} をしている」が容認しにくいことから、身体部位名詞としての文字通りの解釈に基づいて構文が成立していると分かる。

さらに、「袴姿」「恰好」など、〈衣類〉に近い意味を表すヲ格名詞が観察された。影山(1990)や角田(1991, 2009)で、〈衣類〉は〈状態〉を表すNヲシテイル構文において容認されないとされているにも関わらず、である。

(19) a. 新汰よりも一回り大きな巨軀は、古風な袴姿をしていた。(BCCWJ PB29_00408)

b. 「…古い図版じゃ、虎皮の褌をした鬼の恰好をしているしな。」

(BCCWJ LBp9_00246)

これらの表現は、「??彼は {古風な袴姿／鬼の恰好} をした」のようにシタ形が許されない。「袴姿」「恰好 (格好)」以外に「なり、身だしなみ、ネクタイ姿」などの名詞も観察された。いずれも「衣類」あるいは「服装」に該当する概念である。しかし、よく考えてみると、これらの名詞の具体的な意味は、〈衣類〉を主体が纏うことによって、主体と一体化した〈外観〉であると考えられる。つまり、〈衣類〉と〈外見・外観〉は概念的に地続きであり、後者として捉えられる限りにおいては、当該構文が成立すると言える。

次に、複雑語の語構成とカテゴリー間の関係性を見る。〈状態〉を表すNヲシテイル構文のヲ格名詞として様々な複雑語が見られるが、その中で、造語成分である前項要素と後項要素が異なる意味カテゴリーを表す場合がある。

- (20) 体色、顔色 [部分>色] 体型、葉形 [部分>形]
 骨相、手相 [部分>外観] 面構え、門造り [部分>構造・成り立ち]
 体質、髪質 [部分>性質] 色艶、色調 [色>性質]
 (cf. *色体、*型体、*相骨、*構え面、*質体、*艶色)

例えば、「体色、体型、体質」では、「体」という部分名詞に様々な名詞が後続して、「体」に帰属する特性を後項要素が指定する働きをしている。これは、「ルビー色」「卵形」「環状構造」「やせ様」「武器依存」に見られる前項と後項の意味関係とは大きく異なる。前者の場合、前項要素に帰属する特性を後項要素が表すのに対し、後者の場合、前項要素が後項要素の表す特性を具体的な値に限定する。つまり、前者は帰属・所有関係であり、後者は修飾限定 (attributive modification) の関係と言い換えられる。

(20)の名詞の意味的關係を見てみると、〈部分〉が様々な特性と結びついていることが分かる。一方、「体質、色艶、音質」のように、何らかの「質 (quality)」を表す造語成分は、〈部分〉〈色〉などの様々な意味カテゴリーを表す要素に後続することができる。このような造語成分同士の意味的關係を、角田(1991, 2009)の所有階層 (所有傾斜) の観点から考えると、部分名詞が階層上上位にあり、その下位に来る様々な特性によって具体化されるのに対し、〈性質〉は階層上下位にあり、様々な特性カテゴリーに帰属する〈性質〉を表す複雑語を作るのだと捉えることができる。実際、これらが逆の順となった複雑語は容認されない (例: * {色体／型体／質体／艶色／質音})。つまり、〈特性〉同士においても一定の順序關係が成立すること、さらに言えば、もっと細かな階層關係が成り立つことが示

唆される。

〈状態〉のNヲシテイル構文に関して最後に指摘する点として、表2に挙げた名詞の意味カテゴリーが、〈単なる状態〉を表す一般動詞（「第四種動詞」（金田一 1950））が表す概念とかなり共通していることが挙げられる。

- (21) a. (外見) 角ばる、尖る、入り組む、～の形をする、～の色をする
b. (感触) ざらつく、でこぼこする、つるつるする、すべすべする
c. (性質) 優れる、際立つ、馬鹿げる、間が抜ける、こみいる、ませる、ありふれる、しゃれる、かわる
d. (態度) 堂々とする、世なれる、もったいぶる、気取る、いばる
e. (体格) がっしりする、ほっそりする、ぼっちゃりする、やせる
f. (位置関係) 面する、沿う、隔たる、離れる
g. (その他) そびえる、行き届く、満ち足りる、連れる、似る、適する、富む
- (砂川 1986: 37、一部漢字表記に変更)

(21)に列挙される意味概念を見ると、〈状態〉のNヲシテイル構文がやはり〈単なる状態〉を表すことが独立して支持されることが分かる。

4.2 ヲ格名詞の修飾要素の特徴

次に、観察されたヲ格名詞の修飾要素に目を向けてみると、興味深い事実がいくつか観察される。まず、ヲ格名詞句において修飾要素がない事例が散見される。

- (22) a. 塩の結晶は白色ばかりでなく、紅色、黄色などさまざまで、縞模様をしています。
(BCCWJ LBa4_00002)
b. その本田さんが、たまにネクタイ姿をしています、私がオヤッと思ったのが、いつも三菱銀行の人と会うときなのでした。
(BCCWJ OB4X_00082)

いずれも、連体修飾要素を欠いた例であり、複合名詞であることが特徴的である。影山(1990, 2004)、角田(1991, 2009)など、従来からヲ格名詞の修飾要素の必須性は指摘されてきているが、影山(2004)や森山・梅原・富永(2015)、大神(2023)などで、修飾要素を欠く(22)

のようなヲ格名詞の例も指摘された。特に、影山(2004)や岸本(2023: 22-25)は、主要部名詞と修飾部名詞とで主述関係（叙述関係）が成立するという条件を提案している。例えば、「あの人はだんご鼻をしている。」(影山 2004: 35)では、「鼻」と「だんご」が主述関係になっているとされる。しかし、小葉(2023b: 44-45)において、主述関係が成立しない実例が指摘されている。実際、(22)も例えば「??塩の結晶は模様が縞だ」のように主要部の造語成分とその修飾要素とで主述関係は成立しない。

一方、大神(2023)では、「太鼓腹」のような、後項要素が〈部分〉を表す複合名詞を考察し、その成立条件として「イメージ・メタファーおよびオノマトペに由来する複合名詞を用いる際に[ヲ格名詞に修飾要素がない]多くの適格な文を成立させる」と述べている。しかし、(22)の例はそのような条件にも該当していない。

修飾要素を必要としない複合名詞は、その形態統語構造内の主要部が〈特性〉を表す名詞あるいは造語成分であることがほとんどであり、形態統語的な主要部が主体の主たる〈特性〉を表し、それを含む語あるいは句全体が具体的な情報を述べる。そのような場合に、この種の修飾要素を欠いた表現は N ヲシテイル構文のヲ格名詞として生起可能となると考えられる。

ヲ格名詞の修飾要素に関する別の特徴として、(16a)で既に見たが、ノ格代名詞がついたものが見つかる点が挙げられる。

- (23) a. 私は酔いつぶれていたその家族が、ようやく動き出したのを見て、ぎくっとして目が釘付けになった。その男の顔が私の顔なのだ。女の顔も、子どもの顔も！みんな私の顔をしている。 (BCCWJ LBI9_00059)
- b. 遺伝子を提供したのは賞金稼ぎのジャンゴ・フェットで、ヘルメットを取った兵士はみな彼の顔をしている。 (= (16a))

これらの例においても、主要部名詞とその修飾要素が主述の関係にないことは明らかである（例： *兵士はみな顔が彼だ。(cf. (23b))）。さらに別の観点で付言すると、影山(2004: 23)は、「*彼女は {その澄んだ目／それ} をしている」という例を挙げ、ヲ格名詞句には「定性制限」が見られると指摘しているが、「私」「彼」も特定の個体を指す定名詞である。(23)の事例は定性制限に違反しており、容認不可能になるはずである。しかしこれらは十分容認可能な実例である。

この問題に対する本稿での立場を述べると、(23)の所有格代名詞を含むヲ格名詞句は、指示対象となる人物の部分を目指すのではなく、その〈形〉や〈外観〉を表すように意味的に拡張していると考えられる。つまり、換喩によって「私の顔の{形/外観}をした顔」「見た目が私の顔と同じ顔」として解釈されている。従って、ここでの「私」「彼」は、具体的な個体としての〈所有者〉を表すのではなく、それらが所有する顔の「タイプ」を指すものとして指示対象を限定する役割を果たしているのである。

5 結論

本稿では、〈状態〉を表すNヲシテイル構文のヲ格名詞の意味的特徴をBCCWJを用いたコーパス調査に基づいて観察することで、「Nヲシテイル構文が表す「状態」とはどのようなものか」という問題について論じた。

本稿の答えとして、「〈状態〉を表すNヲシテイル構文が、典型的には〈色〉〈形〉〈外見・外観〉〈構造・成り立ち〉といった、視覚情報によって認識される主体の特性を表す「視覚優位」の構文的意味をもつ」という観察を提示し、その上で、次のような構文的特徴を明らかにした。

(24) ヲ格名詞について

- a. ヲ格名詞は、主体の様々な特性を表し、各カテゴリーは意味的に連続的な特徴を示す。
- b. 〈特性〉を表す複数の造語成分から成る複雑語の構成から、〈特性〉概念同士も一定の階層的な順序関係にあると考えられる。

(25) ヲ格名詞の修飾要素について

- a. ヲ格名詞が複雑語の場合、その主要部が主体の特性を表す場合には、修飾要素の生起が必須ではない。
- b. 所有者を表すノ格代名詞が修飾要素になる場合、「所有者」の〈部分〉〈特性〉と同じ特徴」という意味にメトニミー的に拡張して解釈される。

今後の課題として、〈状態〉を表すNヲシテイル構文のこれらの特徴を捉えるため、当該構文の詳細な意味分析を検討する必要がある。特に、ヲ格名詞やその修飾要素における形式と意味の対応関係に基づいて分析を行うという課題が挙げられる。別稿に譲りたい。

参考文献

- 大神雄一郎(2021)「状態・性質の「する」構文における修飾要素と身体部位名詞を用いた表現の意味と成り立ち」『認知言語学研究』6, 86-109.
- 大神雄一郎 (2023)「ヲ格に単体の複合名詞を置く状態・性質の「する」構文の表現」『認知言語学研究』8,58-79, 開拓社.
- 奥田靖雄(1978)「アスペクトの研究をめぐって (下)」『教育国語』54, 14-27.
- 小野尚之(2014)「「N をする」構文における項選択と強制」『複雑述語研究の現在』, 岸本秀樹・由本陽子 (編) , 17-40, 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎(1980)『日英比較 語彙の構造』松柏社.
- 影山太郎(1990)「日本語と英語の語彙の対照」玉村文郎(編)『日本語の語彙と意味 (講座日本語と日本語教育第7巻)』1-26. 明治書院.
- 影山太郎(2004)「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4(1), 22-37.
- 岸本秀樹(2023)「「青い目をしている」構文はどのように形成されるのか?」岸本秀樹・臼杵岳・于一楽 (編)『構文形式と語彙情報』, 東京: 開拓社, 2-26.
- 金水敏(2000)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子 (著)『日本語の文法2 時・否定と取り立て』, 3-92, 東京: 岩波書店.
- 金田一春彦(1950)「國語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63.
- 金田一春彦(1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』10, 63-90. [金田一春彦 (1976)『日本語動詞のアスペクト』, 27-61, むぎ書房, 所収]
- 小葉哲哉(2023a)「V 方ヲスル構文における解釈の二重性—構文文法的アプローチ—」『日本語文法』23(1), 189-205.
- 小葉哲哉(2023b)「「N をする」構文の多様性と語彙情報の役割—動詞派生名詞を中心に—」岸本秀樹・臼杵岳・于一楽 (編)『構文形式と語彙情報』, 東京: 開拓社, 27-51.
- 佐藤琢三(2003)「「青い目をしている」型構文の分析」『日本語文法』3(1), 19-34.
- 佐藤琢三(2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』, 東京: 笠間書院.
- 澤田浩子(2003a)「所有物の属性認識」『言語』32(11), 54-60, 東京: 大修館書店.
- 澤田浩子(2003b)「属性叙述における名詞述語文」『日本語教育』116, 39-48.
- 澤田浩子(2012)「味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性」, 影山太郎 (編)『属性叙述の世界』, 東京: くろしお出版, 203-220.

- 砂川有里子(1986)『日本語文法セルフマスターシリーズ2 する・した・している』, 東京: くろしお出版.
- 高橋太郎(1975)「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103, 1-17.
- 高橋太郎(1984)「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』3(12), 18-39, 明治書院.
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語: 言語類型論から見た日本語』, 東京: くろしお出版.
- 角田太作(2009)『世界の言語と日本語: 言語類型論から見た日本語』改訂版, 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志(2021)『日本語文論要綱—叙述の類型の観点から—』, 東京: くろしお出版.
- 宮腰幸一(2009)「「かけ」構文と並行事象構造」『日本語文法』9(2), 36-52.
- 榎山洋介(2021)『[例解]日本語の多義語研究—認知言語学の視点から—』, 東京: 大修館書店.
- 森山卓郎・梅原大輔・富永英夫(2015)「「属性シテイル構文」の構文文法論的考察」『認知言語学研究』1, 156-175.
- 由本陽子(2020)「日本語の「名詞+動詞連用形/形容詞」型複合語形成における「形質名詞」の役割」『名詞をめぐる諸問題—語形成・意味・構文—』, 由本陽子・岸本秀樹(編), 47-67, 東京: 開拓社.
- 吉川武時(1976)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 155-327.
- Tsujioka, Takae(2002)*The Syntax of Possession in Japanese*, New York: Routledge.
- Tsujimura, Natsuko(1990)“Ergativity of Nouns and Case Assignment,” *Linguistic Inquiry* 21(2), 277-287.

データソース

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』[BCCWJ]